



「これからの日本の生きる道」
渡部昇



▲熱心に聴き入る同窓生・教職員・一般の方々

30周年記念懇親会 名古屋学院大学同窓会



「E」の同窓生のみなさん



▲待ちに待った懇親会場へ入場

講演会 「これからの日本の生きる道」

講師 渡部昇氏(わたなべしげいし) 上智大学文学部英文学専攻教授
フロンティア上智大学教授・書評家・英米学会会長、日本インテリゲンチヤ協会理事長

広範な知識と教養に裏付けられた、文明と歴史に関する
明敏な論評は、幅広い世代に支持されている

〈渡部昇氏 講演要旨〉

これまで日本は、「税金」「郵便貯金」「予算」の3つをおさえている人蔵省に対し、批判できるものは誰もいなかった。しかし住専問題が発生し、初めて声を出して大蔵省批判が叫ばれるようになった。絶大な権力の解体、それは明治維新に酷似しているといえる。かつて岩倉具視らは維新後の日本の在り方を「四の五の言つても始まらない、今やるべきは欧化と富国強兵である。」と主張した。今の日本もまさに「四の五の言っている時ではない」状況だといえる。

日本の進むべき方向とは、ユダヤ化することである。世界中に根を張り、様々なビジネスでリードするユダヤ人のようになるべきではないか。歴史的、世界的に見て、日本もユダヤ人の3つの原理(①タローバル化 ②能力第主義 ③契約の徹底)を取り入れざるを得なくなってきた。そして経済市場が一つとなった今、世界中がこの原理から離れられない中で、日本に必要なのは減税である。一つは「所得税率の一律1割化」。最高税率65%の現行所得税では取れない人があまりに多く、35万円しか徴収できていないのが現状である。1割になれば払いやすくなり、逆に確実に50兆円の税収が見込める。そして「相続税廃止」。小さく貧しかったスイスも、相続税を廃止してからは、国民一人当りの所得は高い水準を誇るようになった。

また本来日本のように個人貯蓄の多い国には、ユダヤ人財閥が人づてきでしかるべきだが、税金が高いがゆえに日本の国籍だけは取っていない。減税の効果は、日本がユダヤ人にとって活躍しやすい場となり、日本国籍を取るユダヤ人が増えるという側面も持っている。世界中の金融をおさえている彼らに内にとらえるということは、日本に対する外圧が減り、国際的な地位ががらりと変わることを意味している。

これからの日本の生きる道、それは「減税」、そしてユダヤ人も国籍を取りたがる様になること、これだと考えます。